

章炳麟の竜樹菩薩生滅年月考について

近 藤 治

章炳麟には「大乘仏教縁起考」という長大論文がある。これは彼が日本亡命中の一九〇八年、中国同盟会の機関誌『民報』第一九号に発表したもので、後に上海人民出版社から刊行された彼の全集（一九八二―八六年）の第四巻に再録されている。この論文が右誌の巻頭論文として公にされたとき題名が「大乘仏教縁起説」となっていたこと、すでに前稿で紹介していた通りである。⁽¹⁾

この論文の末尾には、「弁大乘起信論之真偽」と「竜樹菩薩生滅年月考」と題した二つの論説が付載されており、前者は「大乘起信論弁」と改題して全集第四巻に再録されている。しかし後者の方は、前稿で紹介

介した章炳麟生前の著作集『章氏叢書』や『章太炎先生所著書』においても、また全集版においても再録されていない。そこで本稿では、『民報』版に拠ってこの論説「竜樹菩薩生滅年月考」を読み下して紹介しておきたいと思う。パーレン、キッコー等の括弧の使用法は前二稿と同様である。

印度の史学は甚だ微（微弱）なり。故に記す所の年月、往往にして互いに牴牾^{くわいご}有り。仏入涅槃の歳、遠近相較^{くわう}ぶれば、或は千載^{せんざい}を逾^こゆ。此れ真に怪むべき者なり。馬格斯牟刺^{マックス・ミュラー}の定めし仏入涅槃の歳は、耶蘇紀元（西暦）前四百七十七年に在り。今は且姑^{しばらく}其の説に従

う。然して阿輸迦王、仏を去る百年の説⁽³⁾と猶お相会せざるがごとし。馬鳴⁽⁴⁾（アシュヴァゴーシヤ Asvaghosa 一二世紀ごろの詩人、仏教学者）・竜樹の年代に至つては、尤も了悉⁽⁵⁾（究明）し難し。馬鳴・世友⁽⁶⁾（ヴァスミトラ Vasumitra 説一切有部の一祖で天友とも）・脇尊者⁽⁷⁾（パールシュヴァ Pārśva 説一切有部の論師）は迦膩色迦王の時代なるを以て相推せば、則ち馬鳴の生、亦た西歴紀元一世紀の前に在り。而して〔馬鳴の〕弘教は則ち一世紀の中に在り。唯だ竜樹は藐焉⁽⁸⁾（遙遠）として測り難し。

摩耶經⁽⁹⁾に謂く、「仏滅後六百年にして馬鳴有り、七百年にして竜樹有り」と。姉崎正治（宗教学者、一八七三—一九四八）之に拠り、竜樹の弘教は三世紀の前半に在り入寂は三世紀の末に在りと謂う。按ずるに、大般若經（大般若波羅蜜多經）、脇尊者已に其の名を聞けりと雖も、今者伝うる所の六百卷文は、則ち竜樹の結果する所なり。梁高僧伝に拠れば、道行般若經⁽¹⁰⁾、支婁迦讖⁽¹¹⁾の訳す所為り。釈道安云く、「外国の高士（高潔者）、九十章を鈔し（書き写し）道行品と為せ

り」と。則ち道行の鈔時は必ず本經（大般若經）の結集以後に在るを知るなり。又た仏印三昧經⁽¹²⁾、安世高の訳す所為り。其の中、屢⁽¹³⁾「摩訶般若波羅蜜經」を称す。是れ亦た般若經（大般若經、すなわち大般若波羅蜜多經）の結集以後に在るなり。然れば則ち安世高・支婁迦讖の世を知れば、即ち竜樹の弘教の年を得べし。梁高僧伝に云う、「安世高、漢桓（後漢の桓帝、在位一四六—一六七年）の初を以て始めて中夏（中国）に到る。至止（滞在）すること未だ久しからざるに、即ち華言（漢語）を通習（習得）す。是において衆經（多数の經典）を宣訳し、胡を改め漢と爲る（帰化する）。釈道安、經錄⁽¹⁴⁾に云く、安世高、漢桓帝の建和二年（一四八年）より靈帝の建寧（一六八—一七一年）の中に至る二十余年を以て、三十余部の經を訳出せり」と。又た云う、「支婁迦讖、漢靈帝（在位一六八—一八九年）の時雒陽（洛陽）に遊び、光和（一七八—一八三年）中平（一八四—一八九年）の間を以て、梵文を伝訳（転訳）し、般若道行、般舟、首楞嚴等三經を出せり。又た阿闍世王⁽¹⁵⁾、宝積等十余部の經有

り。歳久しうして録（確かな記録）無し。〔そこで〕安公（安世高）、古今（の文獻）を校定し、文体を精尋（精査）して云く、識（支婁迦讖）の出す所に似たりと」。

夫れ桓帝の初年丁亥は、即ち西曆紀元一百四十八年（實際は一四七年）なり。而して安世高の携えし所の經、既に摩訶般若波羅密（蜜）經の名号を述ぶ。靈帝の光和戊午は即ち西曆紀元一百七十九年（實際は一七八年）なり。而して支婁迦讖已に道行般若を訳せれば、則ち竜樹の弘教必ず西曆二世紀の前半以前に在るを知れり。姉崎の計する所、相去ること百年にして、甚しく合わず。彼の拠る所は、兼ねて有する錫（錫）蘭の載籍（書籍）、提婆（聖提婆 Arya-dēva）の三世紀の前半に在りて竜樹の門人爲るを以てせり。故に〔姉崎は〕竜樹の弘教、必ず是の時（西曆二世紀前半以前）に在るを疑う。然るに此を以て拠と為せば、則ち安世高・支婁迦讖の訳經の時、皆な未だ三世紀に至らず。此れ何たる説なるや。或は羅什（鳩摩羅什 Kumārajīva 三五〇—四〇九ごろ）の五世紀初に在るを疑いて

言く、「竜樹の死後百年を過ぎざ¹⁹」れば、則ち其の（竜樹の）死は必ず三世紀末に在り、と。

按ずるに、印度の歴史甚だ疏（粗略）にして、既に編年の録無し。奢言（しゃげん）もて（大げさに）虚指（いつわりの指摘）し、往往にして事実より離る。且つ中国の如きは司馬遷有り。其の作れる年表、至て精審（精細）爲り。然して其の自序（太史公自序）、太初元年（前一〇四年）の語を挙げて曰く、「孔子の卒後、今に至て五百歳」と。其の實、年表を按じて之を計るに、孔子の卒せし壬戌の歳自り太初元年丁丑の歳に至るは、財かに三百七十五年のみ。漢武の世を尽くす（漢の武帝時代が終わる）は、孔子の卒を去ること未だ四百年ならざるなり。夫れ身から通史（みず）を撰し年表に專精（専心）するの人を以て、而も奢闊（しゃかつ）（大雑巴）に年を指し、猶お相去る闊遠（かつえん）（實際との大きな開き、ギャップ）此の如し。況んや本歴史無きの国においておや。

之を要するに、安世高の訳經の年を以て之を計れば、則ち竜樹の弘道、必ず二世紀の前半に在り、其の生（生誕）当に一世紀末に在るべし。提婆の三世紀前半

に在りて、而も竜樹と相接するを得たるに至つては、則ち印度の伝説なり。竜樹の寿いのちながきこと二百歳を逾こゆるは、或は尽つくく神話に属すに非らず。人生（人の一生）固もとより二百歳なる者有り。漢初の竇公とうこう、上かみは魏の文侯（在位前四二四―前三八七年）の時に逮および、孝文（漢の文帝、在位前一八〇―前一五七年）の世に至る。年百八十歳なれば、則ち二百歳は未だ多く怪むに足らず。西域記に云う、「竜猛りゅうみょう（竜樹）菩薩、善く薬術に閑ない（熟達し）、餌じ（薬になる食物）を餐くいて生を養い、寿年数百、志貌しぼう（氣力と容貌）衰えず」「卷十」と。蓋し実事（本当のこと）なり。

大乘仏教八宗の祖と仰がれる竜樹、ナーガールジュナ Nagārjuna の年代に關し、章炳麟がこの論説で行なつた姉崎正治批判の論点は単純である。姉崎が竜樹の教法上の活動（章炳麟のいう竜樹の弘教）を三世紀の前半、その死を三世紀末以前とするのに対し、章炳麟は竜樹の弘教を姉崎よりも一世紀早い二世紀の前半であるとし、その出生は一世紀末に推定されると主張

する。その論拠は次の如くである。大般若經（大般若波羅蜜多經、また摩訶般若波羅蜜經）六〇〇卷の梵文テキストの結集は竜樹に帰せらるべきものであり、こゝうした彼の弘教活動があつたればこそ、西域出身の高名な訳経僧安世高や支婁迦讖がこれらの梵文テキスト群中より行なつたさまざまな訳経を残すことができた。幸いなことに安世高、支婁迦讖の洛陽滞在は後漢の桓帝、靈帝の時代であつたことが梁高僧伝等によつて明らかである。従つて竜樹の弘教はそれよりも早い、二世紀半ば以前ということになり、姉崎説に比べ一〇〇年早い時期に設定されるべきだ、というものである。

章炳麟は姉崎正治がどの文献で述べていたことに異を唱えたのであろうか。姉崎は早くも二十四歳の齡の明治三〇年（一八九七）十一月、東京の金港堂書籍から『印度宗教史』を公にしていた。この書はヴェーダ神話時代から近代に至るインドの宗教史を七章に分つて述べた全文三六〇ページの堂々たる著書であり、著者名に並んで井上哲次郎閱と並記されているが、姉崎が全文を執筆したことは間違いないと思われる。この

書の第五章第九節は「竜樹の大乗仏教」として二〇〇—二二八ページを充てているが、その年代については僅かに「二世紀の頃西南印度に生れ」（二二一ページ）と述べているのみである。姉崎は翌明治三十一年（一八九八）八月、再び金港堂書籍から井上哲次郎聞と並記した『印度宗教史考全』を公にした。巻末の付記によると、この書は前著を補い、それを教科書に用いる場合の教授参考、研究参照用に用意されたものということ、全文八〇〇ページを越える大冊である。姉崎はこの書のなかで竜樹の年代について、「竜樹が三世紀の前半に教法上の活動をなせしは確実の事実なるが如し」（六二三ページ）、「彼は二世紀の後半に生れ三世紀の大部に生存して大乘仏教の大組織をなせしなら

註

- (1) 近藤治「二〇世紀初頭のインドと中国——章炳麟を中心に——」『鷹陵史学』第二十九号、二〇〇三年。
- (2) Friedrich Max Müller 1833-1900. ドイツ生まれのオックスフォード大学サンスクリット学教授。Sacred Books of the East (東洋聖典集)の編者として著名。

ん」（六二三—六二四ページ）と述べている。章炳麟は姉崎のこの部分の記述を取り上げて批判しようとしたことは、まず間違いないであろう。章炳麟の竜樹年代論には一つの陥穽がある。三世紀のセイロン島出身の提婆（アーリアデーヴァ）が竜樹の門人となっていたとされる伝承が存在することである。提婆入門のエピソードは、『大唐西域記』巻十が実に生きている。これについては、章炳麟はこれをインドの伝説とし、かつまた竜樹の人並みはずれた長寿を挙げることによって軽くかわしている。それにしても、章炳麟は生前にどうしてこの論説を自分の著作集に収めなかったのだろうか。

- (3) アショーカ王の即位を仏滅後一〇〇年とする、主として北伝仏教系の伝承。これに対して南伝系の伝承では、仏滅年をアショーカ即位の二一八年前とする。北伝説の批判を中心とした仏滅年の批判的検討は、山崎元一「仏滅年の再検討」同『アショーカ王とその時代』春秋社、一九八二年所収、に詳しい。

- (4) 摩訶摩耶經。疊景訳。二卷。大正大藏經卷一二所収。同卷一〇一三ページの原文によって、章炳麟所引の文章が「仏涅槃後、…六百歳已んぬ。九十六種の諸外道等、邪見競い興り仏法を破滅す。一比丘、名は馬鳴と曰う有り。善く法要を説き、一切諸外道の輩を降伏せり。七百歳已んぬ。一比丘、名は竜樹と曰う有り。善く法要を説き、邪見を滅して正法の炬を幢然（高揚せり）に拠つたものであることが判る。
- (5) 南朝梁の慧皎撰。一四卷。後の高僧伝と区別するため梁高僧伝と称される。
- (6) 後漢の支婁迦讖訳。一〇卷。道行般若波羅密經、般若道行品經などともいう。大正大藏經卷八所収。
- (7) 大月氏国出身で、二世紀後半の後漢時代に洛陽着。首楞嚴經、般舟三昧經、阿闍世王經、宝積經等の訳がある。
- (8) 四世紀の河北出身僧。漢訳經典の目録化や出家者の規律の整備を行ない、中国仏教の発展に寄与。
- (9) 品はサンスクリット語 paṭiśā の音訳で、同じ種類のものの集合を意味し、書物の章、編をさす。
- (10) 仏説仏印三昧經とも。安世高の訳。一卷。大正大藏經卷一五所収。
- (11) 安息国（パルティア）の王子出身という。支婁迦讖より約二〇年早く洛陽着。
- (12) 『民報』では経餘となつてゐるが、高僧伝卷一によつて訂正した。経録は道安の經典目録、すなわち綜理衆経目録をさす。
- (13) 『民報』では伝議となつてゐるが、高僧伝卷一によつて訂正した。
- (14) 般若道行品經。注(6)参照。
- (15) 般舟三昧經。支婁迦讖訳。三卷。大正大藏經卷一三所収。
- (16) 首楞嚴經。また首楞嚴三昧經とも。二卷。支婁迦讖訳のものは消失し、現存するのは鳩摩羅什訳のもの。大正大藏經卷一五所収。
- (17) 阿闍世王經。支婁迦讖訳。二卷。仏説阿闍世王經とも。阿闍世はマガダ国王アジャータシヤトル (Ajātasattu)。仏滅八年前に即位し、父王殺しの罪を懺悔して仏教に帰依したとされる。大正大藏經卷一五所収。
- (18) 宝積經。支婁迦讖訳。一卷。大正大藏經卷一二所収。
- (19) 章炳麟が引用符を付して記している文章「竜樹死後、不過百年」が何に拠つたのか判然としないが、姉崎正治「印度宗教史考全」東京、金港堂書籍、一八九八年、六二三ページの文章「羅什が五世紀の始に記して竜樹の死後百年を過ぎて南天竺諸国之を尊崇して廟を立てたりといへるは、蓋し羅什が自己より少しく以前の事實を記せるなるべく、其死が三世紀の末以前にあるは明なり」を、章炳麟なりの理解によつて、かなり強引に文意を抽出しようとしたもののごとくである。
- (20) 『民報』の原注では卷五となつてゐるが、卷十の誤りである。